

express している」。だから身体は「自然界の一面であると同時に、自己すなわち「自」とか「自性」とか「それ自身」と言われるようなもの、対象化できない本当の「内から」という、そういうもの」に属している。

self は自己展開として身体という表現をとり、そこにおいて self は世界を身体に映しだしながら、世界の中の個として世界全体との連関にあることを自覚する。また、「作用」としての self の淵源を考察すれば、「生かされて成り立っている、背後から生かされて成り立っているという、そういう存在の構造」をもっている。

このような self は、身体を介して、存在論的に超越的な次元と結びついている。「自性という事を徹底すると、それは世界と一つだから、つまり全体性としての世界がそこに映っているという事だから、自性は同時に無自性だということ」になる。「世界という立場を空という場合、しかし同時にそれが無自性空だというのは、それが個々の事象、事々物々の事象の根本である。自性は、根本的に無自性」である。また、self は生きているものを個別化するが、個別化する self の作用そのものが self を超えた大きな自然に由来する生かされたものである。すべての生命の根底に「全体を包む生命」、「大きな生命」というものがあり、「個体は超個体であるからこそ初めて個体であり得る」という超越的な在り方をしている。この二つの次元の事柄は、「浄土」、「仏国土」、「神の国」などの諸宗教の「身土」の問題のうちに示唆されていると西谷は指摘している。このように西谷の身体論は、本質的に「生きている」ことの

存在論的探求であり、この問題を介して、超越的次元が、自然のうちで生かされて生きる人間の身体の在り方を通じて、必然的に繋がってくることを明らかにしようとする射程を持つ。

鈴木大拙の道元理解

蓮 沼 直 應

近代の禅学者・鈴木大拙は臨済宗の円覚寺での参禅の経験をもとにして、膨大な量の著作を世に残した。そのような背景からか、「予は臨済の看話禅をよいものと思うてをる、只その弊を知りて其利をわすれぬやうにしさへすればよい」と論じ、彼は曹洞禅よりも臨済禅に高い評価を与えている。しかし他方で彼は、臨済と曹洞という区別については単に伝統的な宗派の歴史の違いであるとし、「禅は元来一味のものでなくてはならぬ」と論じている。

しかし、曹洞宗を建立した道元は臨済禅で強調される「見性」を悟りとして認めないなど、臨済禅に対して強い批判を加えていた。大拙の禅理解もまたこの「見性」を強調するものであるため、道元の臨済禅批判は大拙をもその範疇に含むかのように思われる。もし大拙が、臨済と曹洞を本来一つの「禅」としてみなしているとするならば、大拙は自らの立場を批判する相手を、自らの思想のうちに組み込もうとしていることになる。本発表では大拙が、その著作中においてこの点にどう対処しているかを明らかにした。しかしながら大拙は道元の臨済禅

批判を一つ一つ詳細に取り上げている訳ではないため、本発表では臨済禅と対立する道元独自の立場を①「見性批判」、②「修証一等」、③「只管打坐」という三点に限定して、これらの点に対して大拙がどのように論じているかを考察した。

大拙は『禅思想史研究第一』(一九四三年)、そして『禅の思想』(一九四三年)の二書で、道元の禅思想について、積極的な解釈を試みている。

道元の見性批判をめぐって大拙は彼とは異なる見性理解を示していることを確認した。そしてそのことによってむしろ大拙の主張内容が道元の批判内容と軌を一にしているということを確認した。道元は、「見性」を語義通り、「性を見る」という構造で捉え、悟りとして個的で常住名「性」を想定することは外道の見解であると批判していた。一方大拙は「見性」を「見即性」という関係とみなすことで、「見性」を主張しつつも、道元と同じく個的で常住な「性」を否定するという結論に至っている。

また、道元は公案を駆使して修行する臨済禅を「待悟禅」として批判し、証と不可分のものとして修行を位置づけた。この「修証一等」の思想について、大拙は見性の内容たる「定慧不二」によってそれを説明した。すなわち悟りそのものと、働きの出す智慧という構造を道元の「証」と「修」に適用したのである。道元にとって本来、見性とは無縁の実践として想定されていた「修証一等」を、大拙はむしろ見性体験の内容として理解しようとしたのである。

その結果、「修証一等」の具体的な行法としての「只管打坐」

についても、大拙はそれを悟りの働きが現れている「大用現前」の坐禅として位置づけ、見性の現場としての坐禅とみなしたのであった。しかしながら、道元が仏行として坐禅を特別視していたのに対して、大拙は坐禅をあくまでも悟りの多様な表現の一つとして理解しようとした。彼は「定慧不二」の「定」を単に坐禅による精神の統一状態とはみなさず、人間の一挙手一投足すべての行為が「定」となりうると考えており、そのため「大用」が現前する行を坐禅だけに限定せず、人間の振る舞い全般をその行であると捉えたのであった。

以上のように、大拙の道元理解は、見性批判を展開した道元を、一貫して見性の立場から解釈するというものであった。このような解釈が道元の真意に合致するかどうかには多数の問題があるが、大拙自身の思想を理解する上で、このような解釈は重要な要素を内包しているように思われる。

鈴木大拙と華嚴経

嶋 本 浩 子

鈴木大拙(一八九〇—一九六六)は、海外に対して、主に禅思想を紹介したことで知られる。しかし、大拙は、華嚴経思想も重視していた。そこで、本稿では、大拙と華嚴経思想について検討したい。

大拙は、昭和三十年に著述した『華嚴の研究』の序文で、『華嚴』のことはずっと昔から気にかかっていた、今でも「そ